



社会科教育講座 今正秀 教授



未来をひらく歴史学

キーワード 平安時代史/ 摂関政治/ 院政/ 古代国家/ 古代天皇制

どのような研究をなぜ行っているか

歴史学は、洋の東西を問わず、もっとも早くから存在した学問の一つです。では、歴史学という学問はなぜ生まれたのでしょうか。歴史学が対象とするのは「歴史」、すなわち「過去」ですから、この問いは、人類がなぜ歴史＝過去に興味・関心をもったのかということになります。同時にそれは、歴史を知ることがわたしたちにとってどのような意味・意義を持つのか、歴史学という学問がどのような役割を持ちうるのかということでもあります。

歴史＝過去とは、今日に至るまでのわたしたちの歩みです。それをふり返ることで、わたしたちはどのようにして「いま」に至ったのか、あるいは、わたしたちはどのようにして「いま」を形づくってきたのかを知ることができます。それは過去を正しく知る、歴史について正しい認識をもつことです。

ところで、過去はいいことばかりで満たされているわけではありません。むしろ、さまざまな過ちとそれがもたらした不幸や悲慘に覆われている感を受けることさえあります。では、なぜそのような過ちを犯したのか。それを明らかにすること、そしてそれを語り継いでいくことは、過ちを犯した人や集団、国家とその流れを汲む人々にとってはつらいことかもしれません。しかし、過去に目を背けるものは過ちへの道を繰り返すことになりかねません。だからこそ、過去を糾弾し断罪するためではなく、同じ過ちを繰り返さないため、わたしたちはいかなる過去にも向き合わなければなりません。それは未来に向かうためにこそ必要なものであり、本当の意味の勇気を必要とします。日本の歴史は、この国の主権者であるわたしたちが、この国の未来を考えようとするとき、多くの示唆を与えてくれます。歴史学は過去を対象とする学問ですが、それはわたしたちが未来に向かうためにこそ必要なのです。

私自身はこれまで日本古代史、なかでも平安時代を中心に、政治制度、政務運営、政策などについて研究してきました。平安時代は古代国家と古代天皇制が姿を変えていく興味深い時期なのです。史料としては当時の政治の担い手であった貴族の残した日記（古記録）を主に用いています。例えば、摂関政治の全盛期を築いたとされる藤原道長の「御堂関白記」（ユネスコ「世界の記憶」（世界記憶遺産）指定）は他の古記録と比較すると比較的簡略な記述になっていますが、道長の思いや息遣いに触れることができます。史料を読み解くことは史料との対話であり、それを残した人との対話です。そこから歴史が立ち上がっていく瞬間に立ち会うことができるのは研究の醍醐味でもあります。

研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

研究成果の活用としては、まず教員養成教育においてその成果を反映させることに心がけてきました。教科教育は教科の内容研究、つまり歴史教育は歴史学研究成果のもとづいて行われます。そのことを自身の研究と授業の往還において実践するとともに、教員の基本姿勢として学生に伝えてきました。

次に、研究成果を一般にも読みやすい形で提供する機会を得ました。研究成果が広く共有されることで、歴史認識をゆたかにすることに貢献したいと考えます。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

セクシュアリティの多様性について（「教師のための多様性理解」プロジェクト）
教員免許更新講習（「荘園とは何か・どう教えるか」）・夏期講座（「武士の成立」）
「歴史教科書の記述の比較検討」・「日本国憲法の歴史といま」などのテーマでの講演

